



書物に関する瑣末的コメント

三 和 康太郎

(1986年7月2日 受理)

Trivial Comments on Book

Kôtarô MIWA

(Received July 2, 1986)

一般に書物は生活必需品である。本職上あるいは非専門趣味上からも、厄介にならぬ日が、ほとんどない。

印刷・造本学、書誌学や出版業界の慣例、とか云った専門的・文献的知識を持たぬ、ありきたりの一般読者である。だから、いろんな本を読んでいると、さまざまな疑問やコメントを云いたくなる。それらを順不同で書き並べてみよう。関係者から教示なり反論なりを承ることが出来れば、望外の幸せである。

タイトルの「書物」は、「書籍」や「図書」と呼ぶべきかも知れぬ。そこらの正確な区別を知らないの、用語には自信がない。また「瑣末的」とは、わざと遠慮して、そう云ったに過ぎぬので、実は、本質的に重大な話も含んでいるつもりだ、などの前宣伝は、これで止めて、さっそく各論に入ろう。

1. なぜ奥付は前にないのか

もちろん最後の方にあるからこそ、「奥付」なのだろう。洋書にない優れた慣習である点は、定評のある処だ。しかし同じ内容が「前付」にあっても、差支えないではないか。現に洋書では、扉の裏が、極めて不十分ではあるにしても、「前付」に該当する。あれを詳細な内容にすれば、本当の「前付」になるだろう。

今ひとつ誰でも知っている例がある。映画の credit titleこそ、「前付」ではあるまいか。昨今の映画には、そのタイトルが本と同じく最後に出たり、なかには前後2回出す丁重なものもある。しかし『巴里の屋根の下』のような昔の映画は、まず前付から始まっていたのだ。

2. なぜ奥付を映画のクレジット・タイトルのように詳細に作らないのか

奥付の内容は、一般に簡潔である。それに比べると、credit title は実に親切だ。邦画や英語映画ならともかく、ベルイマン作品等だと、当方に判らぬ単語が長々と

つづき、その間我慢せざるを得ないこともある。とにかく制作に絶大の手間をかけているのだから、関係者全員を紹介しておきたいのは、尤もである。

書籍の製造においても、著者・発行元・印刷所や年月日等のみでなく、用紙製造、印刷インキ業者、著者先生を手伝った某氏、タイプ原稿を作成してくれた——多分美人の——某嬢、装丁担当、カバーデザイナー、再三督促に現われた鬼のような編集者、等々が、映画ほど大掛かりではなくても、大ぜいいるだろう。

最近の流れ作業式マスプロ消耗品の新書版などには、そんな手数は不要である。一方重厚な作物ほど、奥付は詳しい傾向があるのも、確かなようだ。S房の箱入限定出版などは、その見本である。せっかくの労作である以上、せめて関係者全員を列記して記録に止めたい、と思うのが人情ではあるまいか。尤も、後世に残すにはむしろ恥ずかしいのものもあるかも知れない。

3. なぜ「かくしノンブル」があるのか

本の中で章が改まるところの、つまり第何章が始まるページだけは、ページの数字が抜かしてある。これがいわゆる「かくしノンブル」だ。

私は、「かくしノンブル」は最も有害な制度だ、と思う。むしろそのページこそ、他の場所よりも、必要性大ではないだろうか。他人が、その論文の参考文献に、誰かの本の章を引用したい、と考えた場合を、想像して見るがよい。ページ数が入っていないから、前後をめぐってやっと確定できるのだ。そんな負担を読者に与える必要が、どうしてあるのか、私には全然理解しがたい。

最近では、ページ数を全部下欄に打ち、かくしノンブルを止めた本も多くなった。数年前、上のような私の持論を、ある出版社の部長に話したところ、彼は「かくしノンブルは出版業界の常識であり、そんな意見は素人のタワ言にすぎぬ」と、私を嘲笑したのであった。仮りにその常識が事実であるとしても、ユーザーの便利さと、どっちが大切なのであろうか。当然のことを考えて見ぬような出版屋は看板を降ろすべきだ、と云うのが、私の結論である。

4. 初版と2版以後、あるいは初刷と2刷以後、とで読者へのサービス度が矛盾して来るのではないか

辞書などが典型例になろう。熱心な読者は、予約申込みをしたりして、発行を待ち兼ねており、当然初版・第1刷を求める。多分ミスプリントが少なくあるまい。一方、不熱心あるいは日和見読者は、第2版以後になってから、徐に買う。そこでは、誤植はかなり直っているだろう。

要するに、忠実熱心なユーザーこそ、最優良品の供給を受ける資格を持つ、と云う商取引の原則——素人なので正確には判らぬけれど、多分そうだろうと思う——が、まさに逆転しているのだ。重大な矛盾ではないか。

むろんこんな点は、すでに誰でも気付いていることだろう。活字印刷出版物の性格上、やむを得ない現象であるのを認めぬ者ではない。しかし、その辺りが何とかならぬものかと、私は何時も考えている。良心的出版社が初版便覧の購入者に正誤表をくれる。もしも振りの客や浮動読者だったら、正誤表の入手方法がないではないか。

5. なぜ活字の色は一般に黒一色なのか

黒色以外の文字が混じって印刷されている本が、最近が多くなった。図、見出し、punch lineなどを、黒でない色にするのは、非常に良い。尤もこれには、受験参考書などの先鞭がある。しかし基調としては、いずれも黒一色が伝統である。今でも学術書はほとんどが黒字である。

ところが文芸的単行本となると、例えば、城 昌幸『みすてりい』(T社, 昭38)、沼 正三『家畜人ヤプー』(T社, 昭45)は、活字が、それぞれブルー、グリーン一色である。昔の本には、そんな発想はなかったのだ。

それゆえ硬い自然科学の本でも、非黒色を使っておかしくないだろう。ただし顔料がちがうと印刷コストに影響するから、商品としての経済性に問題があるにちがいない。けれども青インキで手紙を書くのが行われている以上、ブルーの書物があっても良かったのである。税金対策に関する本などには、青色が望ましいだろう。

それはともかく、読者へのアピールを狙うには、単色刷よりも多色刷が、今後の傾向になることは、確かだろう。ちょうど白黒写真がカラープリントになったように。この点に関しては、学術書よりも、「実用百科」と云ったような雑誌型の本のほうに、章ごとにブルーとブラックを交互に変えるのがあったりして、却って、進歩しているのである。それが極端化すると、婦人雑誌の付録にあるような、ランダム多色刷になってしまう。

6. ラベルを貼ることを予め考えて背の文字を印刷してほしい

図書館に入って本を探していると、著者の名が、ラベルで隠されて、見えなくなっているのが、かなりある。背に貼るラベルの位置から、どうしてもこうなる。

出版社で、そんなことまで考える義務はないのかも知れぬ。しかし図書館や図書室では、分類番号を貼らずに済ますことは、不可能である。だから、やはり出版社で配慮してくれないと、困る。シリーズ名や長いタイトル

であったりすると、文字間の空隙が少なくなる点は、無理もないことではあるけれども。

7. 著者略歴の付いたのと無いのとがあること

著者とか編者の略歴くらいは、奥付かどこかに入れてほしい。従って著者がどんな人か全然判らない単行本もあるのだ。現に私自身がむかし書いた教科書には、著者紹介が載っていなかった。自己宣伝してはならぬとの神の教訓か、当人が泡沫著者によるためか、のいずれかが原因であったのだろう。

略歴と云っても、簡潔なもので足りる。著者の趣味とか生活上モットー等まで書くのは必要であろうか。また貧相な顔写真まで入れて、本人に恥をかかせる義務も、ないだろう。著者自体の解説、という意味があることは判るけれども。

もしもそれが必要であるなら、いっそのこと徹底的に詳しくして、車のナンバー、自宅の坪数、女房の名前など、も書くほうが良い。趣味も、絵・釣・ゴルフ等の一般的なものは平凡だから、知られざる奇癖でも紹介するのが面白だろう。

8. 図書館では著者の意向に反して変な分類をするのはなぜか

これは出版社の責任ではない。また本全体を指すのではないことは、もちろんである。

書物の日本十進分類法は、完成した体系をもつ一大芸術品である。これによってあらゆる本が分類され、収納される。図書館関係者の労力は大変なものだ。それらの点を、とやかく云うつもりはない。

しかし、である。いかに精密な分類であっても、結局は、本を利用する読者のためのものであるはずだ。だから書名自体でなく本の内容そのものに準拠して、分類されねばならない。ところが、時として、著者が考える分類の処とまったくちがう場所に、本が入ってしまう。それは、どの部類の中で利用してもらいたい、と思う著者の意志を、全く無視したことになる。

私の知っている図書館では、前節で触れた私の本が、著者の全く希望しない変な分類箇所に入っているのである。分類に当って、著者が相談を受けたことはない。もし質ねられれば、こういう場所に入れてくれ、と即答できたのに、つまり今の場合、なぜ一言著者に連絡しないのか、と残念に思うのだ。

それではせっかくのりっぱな分類が泣く、と云うものではないか。ここの処が、どのように関係者に考えられているのか。私は、自分に関した事実立脚して、発言しているのである。